

対人関係が「居場所」(安心できる人)に及ぼす影響

－友人関係及び家族関係による検討－

岡村季光

(奈良学園大学人間教育学部)

豊田弘司

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育心理学))

多根井重晴

(奥羽大学薬学部)

The influence of relationships on *Ibasho* (The person who eases one's mind) Examination of friendships and family relationship

Toshimitsu OKAMURA

(Department of Education for Human Growth, Naragakuen University)

Hiroshi TOYOTA

(Department of School Education, Nara University of Education)

Shigeharu TANEI

(Department of Pharmacy, Ohu University)

要旨: 家族並びに友人への親和欲求が、居場所(安心できる人)評定に及ぼす影響を検討した。その結果、1)男女ともに、“父親”、“母親”及び“きょうだい”と家族との親密性は中程度の正の相関であった。2)男子において、“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”と家族との親密性、“父親”“きょうだい”及び“現学校以前の友人”と友人との親密性はいずれも中程度の正の相関であった。一方、友人との親密性において、男子は“現学校以前の友人”と中程度の正の相関であったのに対し、女子は“現学校以降の友人”と中程度の正の相関であった。3)“父親”、“母親”及び“きょうだい”は男女ともに、家族との親密性が予測変数として有意であった。友人においては、“現学校以前の友人”において、男女ともに友人との親密性が予測変数として有意であった。一方、“現学校以降の友人”においては、女子のみ有意であった。

キーワード: 「居場所」(安心できる人) *Ibasho* (The person who eases one's mind)

友人関係 friendships

家族関係 family relationship

1. はじめに

青年期における対人関係は、環境の変化により社会的ネットワークの拡大がみられる(柴田, 2000)。すなわち、中学校までの義務教育から高校、大学や専門学校への進学、あるいは新しい職場など、生活の基盤を移行させながら、対人関係は拡大していく。特に青年期の友人関係においては、重要な他者(significant other)(Sullivan, 1953)が親(または養育者)から同性同年代の友人へと変化すると考えられている。一方、青年期における親子関係にも変化が生じる。古くは心理的離乳(psychological weaning)(Hollingworth, 1929)、すなわち青年の心に生じる「家族の監督から離れ、一人の独立した人間になろうとする衝動」(平石, 2015)が生じるとされている。

しかし、青年期にとって親が同性同年代の友人と比して重要な他者ではなくとも、切り離すことのできない重要な

人物ではありつづける。したがって、重要な他者が変化するということは、古い対人関係を捨てて新しい対人関係を形成するのではなく、従前の対人関係を残しながら、その重要度や機能を変化させつつ、新しい対人関係を付け加えていく営みと言えよう(柴田, 2000)。

さて、青年期において、対人関係を通して自らの居場所を認識することは、学校適応(杉本・庄司, 2006)や精神的健康(石本, 2010)との関連から非常に重要である。本研究では、「居場所」を「安心していられる場所」と定義づける。豊田・岡村(2001)は、居場所研究で多く指摘されていた「精神的安定」という主観的感情を重視し、「居場所」の構造は「時間」、「空間」及び「人間」の要因によって成り立つと考えた。さらに3者は並列的ではなく、人との関係が基礎になり、そこに時間・空間の要因が入ると考えた。

増田(2016)は、対人関係を形成する動機として、1)その人物とつながることで報酬を得られるから、2)他の誰か

と一緒にいたい親和欲求があるから、3)自分につながるものを残したいから、の3点を挙げている。上述のうち、第2の親和欲求とは「誰かとつながって安心したい」という人間観に基づくものである。この人間観は、居場所（安心できる人）（岡村, 2015）の希求に通じるものがあり、対人関係における親和欲求が居場所（安心できる人）に及ぼす影響は十分考えられる。

したがって、本研究の目的は、対人関係が「居場所」（安心できる人）に及ぼす影響を検討することである。具体的には、家族並びに友人への親和欲求が、安心できる人への評定に影響を及ぼすか否かを検討する。

2. 方法

2. 1. 調査対象

調査対象者は近畿圏内に在住の大学生並びに専門学校生142名（男子22・女子120）であった。平均年齢は20歳0か月であった。

2. 2. 調査内容

以下の項目はA3判用紙に印刷された。

2. 2. 1. 「居場所」（安心できる人）ごとの安心できる程度の評定

“あなたは以下の人と居る時に安心できますか。ここで用いている「安心できる」とは、ホッとする、落ち着く等という意味です。”という教示を行い、「自分ひとり」「父親」「母親」「きょうだい」「現学校以前の友人」「現学校以降の友人」という場面を設定した。そして、各場面において安心できる程度を調べるために“5：とても安心できる”から“1：あまり安心できない”の5件法尺度を設定した。

2. 2. 2. 家族関係の親密性に関する評定

「父親・母親・友だちとの関係測定尺度」（小保方・無藤, 2005）を家族との親密性測定として項目の改変を行った。具体的には「父親（母親・友だち）」の部分すべて「家族」に置き換えた（例 家族は普段から私の気持ちをよくわかってくれている）。ただし、“○○のような人でありたいと思う”に入る部分のみ「父親または母親」とした。単一因子の11項目からなっている。各項目について“5：非常にそうである”から“1：全くそうでない”の5件法尺度を設定した。

2. 2. 3. 友人関係の親密性に関する評定

2. 2. 2の項目と基本的に同じである。それらの項目に対応しており、「家族」または「父親または母親」のところを「友人」に置き換えている。単一因子の11項目からなっている。各項目について“5：非常にそうである”から“1：全くそうでない”の5件法尺度を設定した。なお、教示文の末尾には“なお、ここでの友人は1番初めに思い浮かんだ人を対象にします。”としている。

2. 3. 調査手続

第1著者の授業終了後に上述の調査用紙を配布し、以下に示す調査が集団的に実施された。

2. 3. 1. 「居場所」（安心できる人）ごとの安心できる程度の評定

2. 2. 1に記述した調査項目について、“自分ひとり”“父親”“母親”“きょうだい”“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”という場面においてそれぞれ5件法で行った。

2. 3. 2. 家族関係の親密性に関する評定

2. 2. 2に記述した調査項目について5件法で行った。

2. 3. 3. 友人関係の親密性に関する評定

2. 2. 3に記述した調査項目について5件法で行った。

2. 3. 4. 倫理的配慮

調査手続においては倫理的配慮を行った。具体的には、調査用紙冒頭に当該調査の内容に関しては授業とは関係ないこと、結果の処理は全て統計的に処理され個人を特定する形で公表しないことを明記し、調査実施前にも口頭で上述の説明を行ったうえで、調査への回答は自由意志であり調査に拒否しても個人の不利益になることは決してないことを説明した。

3. 結果と考察

3. 1. 「安心できる人（居場所）」ごとの安心できる程度の評定値

安心できる人ごとに集計した安心できる程度に関する評定値の平均が、Table 1に示されている。2（性：男・女）×6（場面：“自分ひとり”“父親”“母親”“きょうだい”“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”）の2要因分散分析を行った結果、性の主効果（ $F_{(1,140)}=8.59, p<.01, \eta^2=.06$ ）、「安心できる人」の主効果（ $F_{(5,700)}=8.70, p<.001, \eta^2=.06$ ）及び交互作用（ $F_{(5,700)}=5.33, p<.001, \eta^2=.04$ ）が有意であった。単純主効果検定の結果、男子においては“現学校以前の友人”の場面が“父親”と比して評定値が高かった。女子においては“自分ひとり”及び“きょうだい”の場面が、“現学校以前の友人”より評定値が低かった。“母親”＝“きょうだい”＝“現学校以前の友人”>“現学校以降の友人”>“自分ひとり”＝“父親”の順に評定値が高かった。

男女共通して“現学校以前の友人”の評定値が高いという結果は、豊田・岡村（2016）と同様であった。これは上述の研究結果から、新しい友人関係がスタートする際に、先行する関係が消滅するわけではなく、同時進行的に関係が存在すること（渡辺, 2014）がうかがえる。

また、女子において“母親”“きょうだい”“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”の評定が高く、“自分ひとり”“父親”の評定が低いという結果も、同様であった。これは女性において男性に比べ他者志向性や関係維持願望が高いこと（佐久間・無藤, 2003）のあらわれと言えよう。

**Table 1 「安心できる人(居場所)」ごとの
安心できる程度に関する平均評定値**

性	安心できる人						
	自分ひとり	父親	母親	きょうだい	以前友人	以降友人	
男子	<i>M</i> 3.86	2.95	3.59	3.32	4.00	3.77	
n=22	<i>SD</i> .99	1.33	1.22	1.25	1.11	.69	
女子	<i>M</i> 3.47	3.61	4.27	4.21	4.30	3.99	
n=120	<i>SD</i> 1.05	1.11	.98	.87	.75	.85	
全体	<i>M</i> 3.53	3.51	4.16	4.07	4.25	3.96	
n=142	<i>SD</i> 1.05	1.17	1.04	.99	.82	.83	

3. 2. 家族関係の親密性に関する評定

調査で使用した各項目の因子構造を明らかにするために、各項目の素点に基づいて、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った結果、固有値1以上の因子は1因子のみであった。これは小保方・無藤(2005)と同様の結果であった。よって、本尺度は1因子構造とみなし、項目の各評定値の合計を家族との親密性得点として算出し、以降の分析を行った。なお、信頼性係数は $\alpha=.93$ であった。得点が高いほど、家族関係は親密であることを示している。

3. 3. 友人関係の親密性に関する評定

3. 2. と同様に因子分析を行った結果、固有値1以上の因子は1因子のみであった。よって、本尺度は1因子構造とみなし、項目の各評定値の合計を友人との親密性得点として算出し、以降の分析を行った。なお、信頼性係数は $\alpha=.93$ であった。得点が高いほど、友人関係は親密であることを示している。

3. 4. 安心できる程度の評定値と各尺度得点の相関

安心できる程度の評定値と各尺度の関係を調べるために、安心できる程度の評定値と、家族との親密性得点及び友人との親密性得点との相関係数(r)を算出した。その結果がTable 2に示されている。男女ともに、「父親」、「母親」及び「きょうだい」と家族との親密性は中程度の正の相関であった。すなわち、親またはきょうだいに安心を感じる者は、家族関係において親密度が増すことが考えられる。

男女別に検討した結果、男子において、「現学校以前の友人」「現学校以降の友人」と家族との親密性、「父親」「きょうだい」及び「現学校以前の友人」と友人との親密性はいずれも中程度の正の相関であった。友人に安心を感じる者は、友人を家族のように感じているのかもしれない。また、父親またはきょうだいに安心を感じる者は、友人のような親密感を感じていることが示唆された。しかし、男子の調査対象者が22名と少なく、結果の解釈には慎重を要する。

さらに、友人との親密性において、男子は「現学校以前の友人」と中程度の正の相関であったのに対し、女子は「現

Table 2 安心できる程度評定値と各尺度得点の相関

	安心できる人					
	自分ひとり	父親	母親	きょうだい	以前友人	以降友人
男						
家族関係	-.37	.62**	.62**	.78***	.43*	.42*
友人関係	-.31	.52*	.34	.59**	.57**	-.01
女						
家族関係	.06	.46***	.69***	.46***	.13	.12
友人関係	-.20*	.14	.17	.12	.19*	.45***

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

学校以降の友人」と中程度の正の相関であった。この結果は、男子が昔からの友人に親密感を感じ、女子は現在所属している学校の友人にそれを感じていると言える。一方、本研究の結果は教示文の影響も考えられる。すなわち、「1番初めに思い浮かんだ人」が男子では昔からの友人を、女子では現在所属している学校の友人をそれぞれ思い出す者が多かったのかもしれない。

3. 5. 対人関係が「居場所」(安心できる人)に及ぼす影響

上述したように、男女ともに、「父親」、「母親」及び「きょうだい」と家族との親密性は中程度の正の相関、男子において、「現学校以前の友人」「現学校以降の友人」と家族との親密性、「父親」「きょうだい」及び「現学校以前の友人」と友人との親密性はいずれも中程度の正の相関、友人との親密性において、男子は「現学校以前の友人」と中程度の正の相関であったのに対し、女子は「現学校以降の友人」と中程度の正の相関であった。それ故、家族との親密性得点及び友人との親密性得点を予測変数、安心できる程度を目的変数とする重回帰分析を安心できる人ごとに行った。その結果がTable 3に示されている。

「父親」(男子 $\beta=.62, R^2=.39$; 女子 $\beta=.46, R^2=.21$)、「母親」(男子 $\beta=.62, R^2=.39$; 女子 $\beta=.69, R^2=.47$)、「きょうだい」(男子 $\beta=.78, R^2=.60$; 女子 $\beta=.47, R^2=.22$)ともに、家族との親密性が予測変数として有意であった。男女ともに、家族関係の親密度が家族への安心感を高めていることが明らかになった。

友人との親密性においては、男女により結果が異なった。すなわち、「現学校以前の友人」においては、男子($\beta=.57, R^2=.29$)、女子($\beta=.29, R^2=.09$)ともに友人との親密性が予測変数として有意であった。一方、「現学校以降の友人」においては、女子($\beta=.49, R^2=.24$)のみ友人との親密性が予測変数として有意であった。

Table 3 安心できる人評定ごとの回帰分析

	安心できる人											
	自分ひとり		父親		母親		きょうだい		現学校以前の友人		現学校以降の友人	
	β	t	β	t	β	t	β	t	β	t	β	t
(男子)												
家族関係			.62	3.56**	.62	3.54**	.78	5.52***				
友人関係									.57	3.07**		
R^2			.39		.39		.60		.32			
F			12.68**		12.56**		30.44**		9.44**			
(女子)												
家族関係			.46	5.66**	.69	10.41**	.47	5.90***				
友人関係									.29	3.37**	.49	6.16***
R^2			.21		.47		.22		.09		.24	
F			32.04***		108.35***		34.80***		11.34**		37.99***	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

3. 6. 本研究の結論と今後の課題

本研究の目的は、対人関係が「居場所」(安心できる人)に及ぼす影響を検討することであった。具体的には、家族並びに友人への親和欲求が、安心できる人への評定に影響を及ぼすか否かを検討した。その結果、1)男女ともに、“父親”、“母親”及び“きょうだい”と家族との親密性は中程度の正の相関であった。2)男子において、“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”と家族との親密性、“父親”“きょうだい”及び“現学校以前の友人”と友人との親密性はいずれも中程度の正の相関であった。一方、友人との親密性において、男子は“現学校以前の友人”と中程度の正の相関であったのに対し、女子は“現学校以降の友人”と中程度の正の相関であった。3)“父親”、“母親”及び“きょうだい”は男女ともに、家族との親密性が予測変数として有意であった。友人においては、“現学校以前の友人”において、男女ともに友人との親密性が予測変数として有意であった。一方、“現学校以降の友人”においては、女子のみ有意であった。

本研究の最も意義のある結果は、居場所(安心できる人)に影響を与える対人関係の要因を明らかにできたことである。ただし、男子のサンプル数が少なく男女別に重回帰分析を行うことの問題があるが、探索的に男女差を見いだすために実施した。それ故、解釈を慎重にならざるをえない部分があり、追加データの分析が必要である。

また、それ以外に居場所に関する研究の意義に関連して、今後の課題として3点を挙げる。まず第1に、対人関係と自分への安心感評定の関係である。本研究では家族または友人との親密性とほとんど関連がみられなかった。岡村・豊田(2016)は、居場所(安心できる人)の評定において“自分ひとりである時”の安心感を高く評定する者は、他者との関係を回避的に捉える傾向を明らかにした。“自分ひとりである”志向が対人関係とどのような関連があるのか、今後検討が必要である。

第2に、友人との親密性と友人への安心感評定の関係である。男子は“現学校以前の友人”の影響が強く、女子は“現学校以降の友人”の影響が強かった。佐久間・無藤(2003)は、女性は男性よりも他者志向性や関係維持願望が高いことを指摘している。本研究の結果は、今の友人関係を維持することで、友人への安心感を高めた可能性が考えられる。また、男女によって教示文のとらえ方が異なる可能性も考えられ、上述の点については、より詳細の検討が必要である。

第3に、家族や友人関係以外の影響の可能性である。特に青年期後期においては、恋人が同性友人と同等に重要な他者として認知される傾向が高く、恋人の存在が与える影響は少なくないと考えられる。豊田・岡村(2001)は、「安心できる人」に恋人を選択する者が一定数存在することを見いだしている。今後は、従前に構築された関係と、新しい環境によって生じる関係をより包括的にとらえることが必要である。

参考文献

- 平石賢二 2015 青年期の親子関係の特徴, 白井利明(編), よくわかる青年心理学 [第2版], ミネルヴァ書房, pp.76.
- Hollingworth, L. S. 1928 *The psychology of the adolescent*, New York: D Appleton & Company.
- 石本雄真 2010 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響, 発達心理学研究, **21**, 278-286.
- 増田匡裕 2016 第1章 対人関係のルーツ 和田実・増田匡裕・柏尾眞津子, 対人関係の心理学—親密な関係の形成・発展・維持・崩壊, 北大路書房, pp.1-18.
- 小保方晶子・無藤隆 2005 親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因, 発達心理学研究, **16**, 286-

- 299.
- 岡村季光 2015 一人ひとりの「居場所」をどうつくるか, 梶田叡一(責任編集)・人間教育研究協議会(編) 実践的思考力・課題解決力を鍛える:PISA型学力をどう育てるか(教育フォーラム55), 金子書房, pp.111-121.
- 岡村季光・豊田弘司 2016 「居場所」(安心できる人)を規定する要因—ひとりで過ごす感情・評価及び成人愛着スタイルによる検討— 奈良教育大学紀要, **65**, 27-34.
- 佐久間路子・無藤 隆 2003 大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連, 教育心理学研究, **51**, 33-42.
- 柴田利男 2000 第5章 青年期の対人関係 藤村邦博・大久保純一郎・箱井英寿(編著), 青年期以降の発達心理学—自分らしく生き、老いるために, 北大路書房, pp.56-74.
- 杉本希映・庄司一子 2006 「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化, 教育心理学研究, **54**, 289-299.
- Sullivan, H.S. 1953 *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. New York: W. W. Norton & Company Inc., 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鑪幹八郎(訳)(1990), 精神医学は対人関係論である, みすず書房.
- 豊田弘司・岡村季光 2001 大学生における『居場所』奈良教育大学教育研究所紀要, **37**, 37-42.
- 渡辺 舞 2014 大学の友人関係は変化するか?—大学4年間の追跡的検討による大学適応感との関連について—, 北星学園大学大学院論集, **5**, 67-81.